

【第159回教育小委員会】地域ユネスコ協会の取り組み事例（役割、今後の展望について）



事例：「平和の鐘を鳴らそう2026」

1954年、世界65カ国の硬貨から鑄造された「国連平和の鐘」が国連本部に寄贈され、毎年、国際平和デーに打鐘の歴史があり、こうした平和への願いを市民レベルで実践する取組として、民間発の「平和の鐘を鳴らそう」プロジェクトが始まった。

本年は、その理念を広く発信するため、ユネスコ加盟75周年記念の全国共同アクションとして実施しました。

■ 取組の目的と成果・効果

目的

鐘を鳴らし、平和について考える体験を通じ、2023年のユネスコ教育勧告が重視する「主体的な参画」と「対話・参加」を、暮らしの中の学びとして実践する

成果

■全国31都道府県・65会場が参加（2026年6月30日登録時点、ユネスコ加盟75周年記念の全国共同アクション）

■10年以上続く実践が多数：岡山（第27回）、沖縄県（第19回）、伊丹（第22回）など、単発でなく地域に定着した継続実施

■事例：岐阜市「平和の鐘」式典（7/9・岐阜空襲81年）には約120人が参列（市長・空襲体験者・岐阜中央中学校生徒等）



■ ユネスコの理念・事業との関連性



「主体的な参画」の事例

●岐阜ユネスコ協会：「平和の鐘」式典×岐阜中央中学校

岐阜空襲（7/9）の式典にユネスコスクール加盟校・岐阜中央中学校の1年生が参列し「平和への誓い」を宣言・合唱。学校教育と正式に接続する事例。



「対話・参加」の事例

●日本ユネスコ協会連盟：高校生カンボジアスタディーツアー実施

ユネスコスクール加盟校の高校生やユ協からの推薦を受けた高校生が実際にカンボジアの地を訪れるツアーに参加。ユネスコカンボジア事務所や世界寺子屋運動の実施場所等を訪問するほか、現地の方との対話等により内戦の残酷さや教育の重要性について学ぶ。さらに、アンコールワット遺跡群を訪れて歴史を感じる。その経験を経て地域ユネスコ協会で活動する子たちもいる。



■ 地域ユネスコ協会が果たしている役割

- 学校・行政・地域を横断的につなぐ地域のハブ機能(豊橋市・教育委員会等の後援、岐阜中央中学校・岐阜市役所との連携など)
- 制度的な裏付けや予算措置がなくても、市民の自発的意志だけで数十年継続してきた「継続性の担い手」(岡山27回、沖縄19回等)
- 高校生を「学ぶ側」から「発信する側」に押し上げる媒介者: 宣言文の作成支援、登壇機会の提供(沖縄モデル、岐阜中央中学校の例)



■ 今後の展望

- 高校生主体の宣言・登壇モデルを、他地域のユ協・ユネスコスクールへ横展開
→名古屋ユネスコ協会・岐阜県ユネスコ協会等:ユネスコスクールによるユネスコ活動発表会の実施
→中部西ブロック(愛知・岐阜・三重・石川・福井):カンボジアスタディーツアー企画(ユネスコスクール・海外とも連携予定)
- 全国共同アクションの実施状況(会場・参加団体)を継続的に収集し、参加者数等の定量指標を今後整備
→「平和の鐘を鳴らそう」の全国アクションの継続
- 民間・市民のユネスコ活動参画の広げ方:未実施地域のユ協への働きかけ、学校(ユネスコスクール)との正式な連携枠組み化
- 教育勸告カード型教材ワークショップと「平和の鐘」行事の連携 — 既存事業の実績あるフォーマットを横展開し、実現可能性を高める

